

芥川竜之介「西方の人」注解 (二)

R. Akutagawa's "SEIHO NO HITO" Explanatory Notes (II)

吉田孝次郎  
中野恵海

8 へ ロ デ

ヘロデは或大きい機械<sup>①</sup>だった。かう云ふ機械は暴力により、多少の  
手数を省く爲にいつも我々<sup>②</sup>には必要である。彼はクリストを恐れる爲  
にベツレヘムの幼な兒<sup>③</sup>を皆殺しにした。勿論<sup>④</sup>クリスト以外のクリスト  
も彼等の中にはまじつてゐたであらう。ヘロデの兩手は彼等の血<sup>⑤</sup>の爲  
にまっ赤になつてゐたかも知れない。我々は恐らくこの兩手<sup>⑥</sup>の前に不  
快を感じずにはゐられないであらう。しかしそれは何世紀か前のキロ  
テインに對する不快である。我々はヘロデを憎む<sup>⑦</sup>ことは勿論<sup>⑧</sup>、輕蔑<sup>⑨</sup>  
することも出来るものではない。いや、寧ろ彼の爲に憐み<sup>⑩</sup>を感じるばか  
りである。ヘロデはいつも玉座<sup>⑪</sup>の上に憂鬱<sup>⑫</sup>な顔をまともにしたまま、  
橄欖<sup>⑬</sup>や無花果<sup>⑭</sup>の中にあるベツレヘムの国を見おろしてゐた。一行<sup>⑮</sup>の詩  
さへ殘したこともなしに……

(注)

①ヘロデ Herod キリスト誕生時代のユダヤ王。前四一年ユダヤの  
総督。前三七年王号を称。残忍で暴政を布き、エルサレムの神殿の  
建築を初め劇場・宮殿の造営のために重税を課した。晩年の嬰兒殺  
しはマタイ伝第二章に記載。

②機械 「侏儒の言葉」の「暴力」に「人生は常に複雑である。複  
雑なる人生を簡単にするものは暴力より外<sup>ほか</sup>にある筈はない。この故  
に往往<sup>つうつう</sup>石器時代の脳髓<sup>なうずい</sup>しか持たぬ文明人は論争より殺人を愛するの  
である。しかし亦<sup>また</sup>権力<sup>ひつみやう</sup>も畢竟はパテントを得た暴力である。我々人  
間を支配する爲にも、暴力は常に必要なかも知れない。或は又必  
要ではないのかも知れない。」とある。

ここで機械というのは、人間でない暴力そのものであるという意味  
であらう。この場合のヘロデは王たるの権力の持ち主であり、この  
権力の前には現実の雑事などは強力に処理される。

③イ、ロ、 我々 イ、の我々の意は、現実の世の多くの人々、一般

大衆の意であり、ロ、の我々というのはもう少し限定して、青白きインテリ―たる芥川にくみする者達、即ち、芥川から見ても、わが党の士という程の意であろうか、とも考えられるのであるが、矢張り一篇の主旨に副って、共に同じ一般の我々という方が穏当であろう。

④ ベツレヘム Bethlehem 新約聖書の福音書に記され、キリストの誕生地とされるパレスチナの村。イェルサレムの南西約八キロ。

現在のベートラム Beit Lahm

⑤ 幼な兒を皆殺し マタイ伝第二章、十六に「爰にヘロデ、博士たちに賺されたりと悟りて、甚だしく憤ほり、人を遣し、博士たちに由りて詳細にせし時を計り、ベツレヘム及び凡てその辺の地方なる二歳以下の男の兒をことごとく殺せり。」とある。

⑥ 勿論 たしかにクリスト達も殺されたわけだから、ヘロデの目的から云えば全く無駄であった訳ではない、多少の役には立っている。そして、むしろそれは徒勞とは言えないであろうが、血を流したことの大ききなことよ。

⑦ クリスト以外のクリスト イエス以外の、「聖靈」に捉らわれたクリスト達を言う。

⑧ 血の爲にまっ赤 殺人者の両手が血で染められるというのはシェークスピアの「オセロ」以来の文学的表現で、「罪悪」を意味する。ここでは「罪悪」につづいて「恐怖」「汚穢」「不潔」の感がそれに籠められる。

⑨ ギロティン guillotine フランス革命で有名な断首台。ギロティ

ンに対する不快とは、まず機械に対する不快であろう。次に、それは殺人者に対する生理的不快であり、非情なるもの、反ヒューマニズムに対する不快をも意味するであろうし、この章の初めの、「大きな機械だった」に通じる。

⑩ ヘロデ このヘロデは機械になってしまったヘロデであろう。

⑪ 橄欖や無花果 パレスチナ地方はオリーブやいちじくの木が非常に多い。

⑫ 一行の詩 「人生は一行のボオドレエルにも若かない」（或阿呆の一生・一、時代）とあり、これは、みすばらしい常凡の人生を超える芸術の永遠の美しさ、一行の詩句の圧搾した芸術の価値の高さを痛感したことは。恒藤恭は「人生の恐るべき退屈」をしみじみと語る嘆息のことばだと言っている。ほかに「舞踏会」（大正・八）の「我々の生のやうな火花」や「奉教人の死」（大正・七）の結末「なべて人の世の尊さは、何ものにも換へ難い、刹那の感動に極るものぢや。暗夜の海にも譬へようず煩惱心の空に一波をあげて、未だ出ぬ月の光を、水沫の中に捕へてこそ、生きて甲斐ある命とも申さうず。」が参考にならう。尚、「或阿呆の一生」の「八、火花」には「架空線は不相変鋭い火花を放つてゐた。彼は人生を見渡して、何も特に欲しいものはなかった。が、この紫色の火花だけは、――凄まじい空中の火花だけは命と取り換へてもつかまへたかっただ。」とある。

(解)

ヘロデの様な権力者、即ちこの世の雑事を強力に処理する機械も  
或る面に於て現世では必要である。(ベツレヘムの二才以下の男の  
児を皆殺しにし、しかもイエスだけを殺しそこねて第二・第三のイ  
エスを殺すというマイナスもあつたが)

我々は殺人者に生理的な嫌悪感をいだかざるを得ないだろうが、  
それはギロチン以後生じた、たわいもない感傷的なものに過ぎなく  
て、本質的には、ヘロデに対して、憎しみや、軽蔑をつき通す事は  
不可能である。一行の詩をも生む事の出来なかつた、そして機械そ  
のものになつてしまつたヘロデ、人生の憂鬱、退屈の真只中にある  
ヘロデを、我々は憐れむ。

### 9 ボヘミア的精神

幼いクリストはエヂプトへ行つたり、更に又「ガリラヤのうちに避  
け、ナザレと云へる邑」に止まつたりしてゐる。我々はかう云ふ幼な  
児を佐世保や横須賀に転任する海軍將校の家庭にも見出すであらう。  
クリストのボヘミア的精神は彼自身の性格の前にかう云ふ境遇にも潜  
んでゐたかも知れない。

(注)

①ガリラヤのうちに…… マタイ伝第二章二二・二三に「また夢に

て御告を蒙り、ガリラヤの地方に退き、ナザレといふ町に到りて住  
みたり。」とある。

②佐世保や横須賀 ともに、海軍鎮守府のあつた軍港。

③ボヘミア的精神 俗世間のおきてを無視して放浪する人々に似た  
精神状態。

④前に クリストのボヘミア的精神は、彼自身の性格に由るであろ  
うが、さらにそういう性格が形成される前にすに。

⑤境遇 侏儒の言葉に、運命と題して「遺伝、境遇、偶然——我々  
の運命を司るものは畢竟この三者である。自ら喜ぶものは喜んで  
も善い。しかし他を云々するのは僭越である。」とある。

(解)

この章全体の発想が侏儒の言葉的で、奇駁な着想、皮肉な表現であ  
る。永遠の旅人、聖者イエスを遺伝の他に境遇に於て説明しようと  
する。それは、全くの人間扱いに徹する心であり、海軍將校の子弟  
もイエスも、人間として、その成り立ちの質に於て変りはないとす  
る、芥川のキリスト論の根本的姿勢ではないか。

### 10 父

クリストはナザレに任んだ後、ヨセフの子供でないことを知つたで

あらう。或は聖霊の子供であることを、——しかしそれは前者よりも決して重大な事件ではない。「人の子」クリストはこの時から正に二度目の誕生をした。「女中の子」ストリンドベリイはまづ彼の家族に反叛した。それは彼の不幸であり、同時に又彼の幸福だった。クリストも恐らくは同じことだったであらう。彼はかう云ふ孤独の中に仕合せにも彼の前に生まれたクリスト——バプテスマのヨハネに遭遇した。我々は我々自身の中にもヨハネに会う前のクリストの心の陰影を感じてゐる。ヨハネは野蜜や蝗を食ひ、荒野の中に住まつてゐた。彼の住まつてゐた荒野は必しも日の光のないものではなかつた。少くともクリスト自身の中にあつた。薄暗い荒野に比べて見れば……。

(注)

①ナザレ Nazareth クリストがその少年期を過ごした所。

②前者よりも決して重大な事件ではない この場合、前者というのは、ヨセフの子供ではない、私生児である、という事で、「聖霊の子」だと知ること、現実の父の子ではないと知る事より重大事件という訳にはゆかぬ、の意。ここでも芥川は私生児を問題にするのである。

③「人の子」 聖書におけるイエスの自称。「誰にても言をもて人の子に逆ふ者は赦されん、然れども言をもて聖霊に逆ふ者は、この世にても後の世にても赦されじ」(マタイ伝第十二章、三十二)「彼らガラヤに集ひをる時、イエス言ひたまふ『人の子は人の手に

付され、人々は之を殺さん、斯て三日めに甦へるべし』弟子たち甚く悲しめり。」(マタイ伝、第十七章、二十二。二十三。)聖書の中の語であるので芥川はこの人の子に括弧をつけた訳であるが、聖書での「人の子」の意味は聖霊の生れ変り(化身)の意であるのだが、芥川のそれは、イエスはたとえ天才ではあつても「人間」そのものであるという意味を強めて使っている。

④二度目の誕生 肉体の誕生に対して精神の誕生を意味する。多く、幼少年期の自我意識の芽生えや覚醒をいう。この場合はイエスが、自分はヨセフの子ではないと知った事がそれに当るといふ芥川の叙述。

⑤「女中の子」 ストリンドベリイ August Strindberg (1849~1912) はスウェーデンの小説家・劇作家で、商人を父とする女中の子として生まれた。作品に「女中の子」(一八八六)がある。

⑥ヨハネに遭遇した 「爰にイエス、ヨハネにバプテスマを受けんとて、ガラヤよりヨルダンに來り給ふ」(マタイ伝、第三章、十三)

⑦野蜜や蝗を食ひ 「このヨハネは駱駝の毛織衣をまとひ、腰に皮の帯をしめ、蝗と野蜜とを食とせり。」(マタイ伝、第三章、四)

⑧薄暗い荒野 荒涼とした精神を意味するであろう。それは親との関係に於ける不安であり、安心の出来ないものである。ヨハネの住む荒野にあつた「日の光」とは、いのちであり、遂にはイエスをもはぐくむ要素であつた事が知られる。

(解)

クリストはナザレに住んだ後、ヨセフの子供でないことを知ったであろう。聖霊の子である事などは、この事にくらべるとさして重大な事ではなかった。人間の子クリストはこの時からまさに第二の誕生をしたのである。

「女中の子」ストリンドベルヒはまず彼の家庭に反叛した。それは現実面で彼の不幸ではあったが、第二の誕生を忠実に生き抜く事は又幸福であったとも言える。クリストも又同じ。

私生児だというレッテルを貼られた事から来る孤独と不安定な心、目覚めた自己に忠実ならんとする事から来る荒涼たる心を持つたまま先駆者ヨハネに遭遇したことは幸いだった。ヨハネに会う前のクリストの心の陰影は全く荒涼としたもので俗人の我々にも推察出来る。ヨハネは荒野に住み、野蜜や蝗を食っていたが出生に秘密のないヨハネにはおのずからなる生命の灯があった、イエスにはヨハネに会うまではそのような明るさや幸福はなかったのだ。

「父」という題意は、人の出生に於ける父の役割は現実に大きな作用を及ぼす、という事から、私生児イエスの心の中をのぞいてみたい心が芥川に動いているのではないかと思われる。肉体の父という事で、「人の子」と「女中の子」を採り上げ、精神の父として、ヨハネに触れたのではないか、そしてヨハネの持つ日の光、その明るさは、遂にはイエスをはぐくむ要素ともなった事を想わせる。

11 ヨ ハ ネ

① パプテズマのヨハネはロマン主義を理解出来ないクリストだった。彼の威厳は荒金のやうにそこにかがやいてゐる。彼のクリストに及ばなかったのも恐らくはその事実に存するであらう。クリストに洗礼を授けたヨハネは榊の木のやうに逞しかった。しかし獄中にはいつたヨハネはもう枝や葉に漲つてゐる榊の木の力を失つてゐた。彼の最後の慟哭はクリストの最後の慟哭のやうにいつも我々を動かすのである。――

② 「クリストはお前だったか、わたしだったか？」

ヨハネの最後の慟哭は――いや、必しも慟哭ばかりではない。太い榊の木は枯れかかったものの、未だに外見だけは枝を張つてゐる。若しこの気力さへなかつたとしたならば、二十何歳かのクリストは決して冷かにかう言はなかつたであらう。

③ 「わたしの現にしてゐることをヨハネに話して聞かせるが善い。」

(注)

① パプテズマ *baptisma* (ギリシャ語) キリスト教会への入信の儀式。全身を水中に浸し(特に浸礼とも訳す)また水を頭にそそぐ。洗礼。パプテズマのヨハネは神の国の近きを予言し、ヨルダン河でイエスはじめ多くの人に洗礼を施した。ヘロデ・アンチパス王

の不倫を諫めて斬首。洗礼者ヨハネと呼ばれる。

② ロマン主義を理解出来ない 詩的創造力に生きる事が理解出来ない。尚この「ロマン主義」については、「18クリスト教」参照。

③ 櫛の木 この章に於ける櫛の木の比喩は正々堂々と現実に対処する生命力のたくましいヨハネをたとえたものと解される。

④ 彼の最後の慟哭 「ヨハネ牢舎にてキリストの御業をきき、弟子たちを遣して、イエスに言はしむ『来るべき者は汝なるか、或は他に待つべきか』(マタイ伝・第十一章、二三)

⑤ クリストの最後の慟哭 「三時ごろイエス大声に叫びて『エリ、エリ、レマ、サバクタニ』と言ひ給ふ。わが神、わが神、なんぞ我を見棄て給ひしとの意なり。」(マタイ伝・第二十七章、四六)

⑥ クリストはお前だったか、わたしだったか? この個処は聖書では注④に示したように、わたしだったかではなく、「他に待つべきか」である。即ち、神からつかわされた、神の子、神の託身(化身)はあなたですか、それとも、他にあって、その方の出現をお待ちすべきですがが聖書の文章で、ヨハネがイエスに、おそろおそろ聞いている形である。それを、あなたか、わたしかという烈しい慟哭と、とつたのは芥川独自の解釈といふべきで、芥川は聖書の恐れ敬う様なヨハネの言葉から、ヨハネの気力のおとろへを見たのであらう。

⑦ わたしの現に……『ゆきて、汝らが見聞する所をヨハネに告げよ。盲人は見、跛者はあゆみ、癩病人は潔められ、聾者はきき、死人は甦へらせられ、貧しき者は福音を聞かせらる。おほよそ我に蹟かぬ

者は幸福なり。』(マタイ伝・第十一章、四・五・六)

(解)

正々堂々と悪びれず現実に対するヨハネの人間性に触れ、詩や夢を持たずに現実には敗れたヨハネの慟哭に人間的同情を覚えたという風に解される。ヨハネと題された所以であらう。対照的に神の国に住む夢に生きたイエスの優位性と峻厳な自持にふれている。

## 12 悪魔

クリストは四十日の断食をした後、目のあたりに悪魔と問答した。我々も悪魔と問答する為には何等かの断食を必要としてゐる。我々の或ものはこの問答の中に悪魔の誘惑に負けるであらう。又或ものは誘惑に負けずに我々自身を守るであらう。しかし我々は一生を通じて悪魔と問答をしないこともあるのである。クリストは第一にパンを斥けた。が、「パンのみでは生きられない」と云ふ註釈を施すのを忘れた。それから彼自身の力を特めと云ふ悪魔の理想主義的忠告を斥けた。しかし又「主たる汝の神を試みてはならぬ」と云ふ弁護法を用意してゐた。最後に「世界の国々とその榮華と」を斥けた。それはパンを斥けたのと或は同じことのやうに見えるであらう。しかしパンを斥けたのは現実的欲望を斥けたのに過ぎない。クリストはこの第三の

答の中に我々自身の中に絶えることのない、あらゆる地上の夢を斥けたのである。この論理以上の論理的決闘はクリストの勝利に違ひなかつた。ヤコブの天使と組み合つたのも恐らくはかう云ふ決闘だつたであらう。悪魔は畢にクリストの前に頭を垂れるより外はなかつた。けれども彼のマリアと云ふ女人の子供であることは忘れなかつた。この悪魔との問答はいつか重大な意味を与へられてゐる。が、クリストの一生では必しも大事件と云ふことは出来ない。彼は彼の一生の中に何度も「サタンよ、退け」と言つた。現に彼の傳記作者の一人、——ルカはこの事件を記した後、「悪魔この試み皆畢りて暫く彼と離れたり」とつけ加へてゐる。

(注)

- ①断食 「爰にイエス御霊によりて荒野に導かれ給ふ、悪魔に試みられんと為るなり。四十日、四十夜、断食して、後に飢えたまふ。」(マタイ伝・第四章、一・二)あと、悪魔との問答は、十一章までつけられる。
- ②何等かの断食 どんな意味でかの苦行、という程の意であろう。そして、「悪魔と問答する為には」というのは「問答をして勝つためには」の意である。
- ③問答をしない 一生、平凡、低俗のままをわる、おめでたい人間。
- ④パンを斥けた 試むる者きたりて言ふ『なんぢ若し神の子なら

ば、命じて此等の石をパンと為らしめよ』答へて言ひ給ふ『人の生くるはパンのみに由るにあらず、神の口より出づる凡ての言に由ると録されたり』(マタイ伝・第四章、三・四)

⑤註釈 「パン」なるものを全面的に否定せずパンの必要性もふくませた言い方。

⑥彼自身の力を持め 「なんぢ若し神の子ならば己が身を下に投げよ」(マタイ伝・第四章、六)

⑦主たる汝の 「イエス言ひたまふ『主たる汝の神を試むべからず』と、また録されたり』(マタイ伝・第四章、七) 試みるとは理知上の問題であり、信仰の問題とは異質であるから。

⑧弁護法 「筑摩版」の全集。(第五卷・昭33)新潮文庫本(昭43)、旺文社文庫本(昭44)「角川版」の日本近代文学大系・第38卷芥川龍之介集、の本文はすべて、弁證(証)法となっている。何れにしてもここは、巧みな弁論、高等な問答法の意であろう。この場合の「神を試みる」というのは神を試めず、当てにするという程の意であろう。

⑨榮華 「悪魔またイエスを最も高き山につれゆき、世のもろもろの国と、その榮華とを示して言ふ、『なんぢ若し平伏して我を拜せば、此等を皆なんじに与へん』(マタイ伝・第四章、八)

⑩現実的欲望 目先の欲の意。

⑪ヤコブの……ヤコブはアブラハムの孫、イサクの子。イスラエル民族の祖、兄エサウを欺いて相続権を奪い、母の故国ハラシにおもむき帰る途中、神と力比べをする。

「旧約聖書」の「創世記」に「而してヤゴブ一人残りしが人ありて夜の明るまで之と角力す。其人己のヤゴブに勝たざるを見てヤゴブの髀の枢骨に触れしかばヤゴブの髀の枢骨其人と角力する時挫離たり。」(第三十二章、二十四)

⑫ かう云ふ決闘 全力を振りしぼった決闘。全身全霊をあげての意で、善智善能、最高の才能が要求されるだろう。この場合イエスが「論理以上の論理」(普通の論理を飛躍した論理)を駆使した所以である。

⑬ 彼のマリアと云ふ……イエスが人間の子であるという事、だからいつか誘惑出来るという悪魔の方での見込みがあった。悪魔の方ではこの試みの失敗だけでは、イエスの誘惑を断念しなかった。

⑭ いか重大な…… この問答はいつの間にか聖書では重大な意味が与えられている。

⑮ 「サタンよ、退け」 「爰にイエス言ひ給ふ、『サタンよ、退け』」(マタイ伝・第四章、一〇)

⑯ ルカ Luke ルカ伝の著者。使徒パウロの伴侶であった医師ルカがイエスの伝記を異邦人に紹介するために書いたものという。

⑰ しばらく彼を離れたり「悪魔あらゆる嘗試を尽してのち暫くイエスを離れたり。」(ルカ伝・第四章、十三)

(解)

侏儒の言葉の「創作」が想起されるところである。その終りのところ「芸術は妙に底の知れない凄みを帯びているものである。我々

も金を欲しがらなければ、又名聞を好まなければ、最後に殆ど病的な創作熱に苦しまなければ、この無気味な芸術などと格闘する勇氣は起らなかったかも知れない。」とある。ここは「永遠に超えんとするもの」そして詩的正義をうちたてんとする、イエスが悪魔と格闘する場面である。釈迦が成道に際して悪魔を降伏したという經典の華やかな表現と軌を一にした聖書の扱いに対して、芥川は、イエスが悪魔と問答しなければならぬ必然性と、イエスの超人ぶりを叙しながら、人間性の弱点に執拗につけ込む悪魔の在り方を、からませた章と解される。

### 13 最初の弟子たち

クリストは僅かに十二歳の時に彼の天才を示してゐる。が、洗礼を受けた後も誰も弟子になるものはなかった。村から村を歩いてゐた彼は定めし寂しさを感じたであらう。けれどもとうとう四人の弟子たちは——しかも四人の漁師たちは彼の左右に従ふことになった。彼等に対するクリストの愛は彼の一生を貫いてゐる。彼は彼等に圍まれながら、見る見る鋭い舌に富んだ古代のジャアナリストになつて行つた。

(注)

①十二才の時 ルカ伝・第二章、四十二より五十二まで。十二才の

時慣例に従って祭のために両親と共に上京したが自分だけ無断でエルサレムに止っていた。両親は三日後、やっと探し当てたところ「何故われを尋ねたるか、我はわが父の家に居るべきを知らぬか」と言ったが両親は「その語りたまふ事」を悟らなかつた、とある。

② 四人の弟子たち ペテロ、アンデレ、ヤコブ、ヨハネ。(マタイ伝・第四章、十八〜二十二)

③ しかも四人の漁師たち この、たった四人の弟子は、しかも下賤で無知な漁師だった、程の意。

④ 圍まれながら 無知な弟子達にとりかこまれながら、彼等にひきづり込まれないで。ひき入れられないで。

⑤ 古代の 古代の初、という程の意であらう。

⑥ ジャアナリスト 時事、日常に即して自分の思想、信念を大衆に訴えひろめる、大衆を動かす者。その様な性質の人間、そんな才能の所有者の意であらう。

(解)

この章の初めに、キリストはわずか十二才の時にその天才を示した、と述べ、すぐつづいて、が然し洗礼を受けた後……とあるのは、キリストの力強いその天才ぶりの一面をとりあげたのである。即ち村から村へ歩いて天才キリストが孤独を感じたこと、とうとうつき従う事になったわづか四人の弟子は、然しながら無知な庶民であったこと、でもその弟子達を一生変らず愛しぬいたことなど。しかも愛しながらその平凡な弟子達にひき入れられないで、ぐんぐん

弁舌の才をのぼし、古代初のジャーナリストになったのであった。「最初の弟子たち」と題されたのは、後にはすぐれた弟子が出来たが最初の彼等がそろいもそろって無知下賤な者達であったという事がジャーナリストたる才をのぼすことになったというところに意味をもたせたものと思われる。

#### 14 聖霊の子供

キリストは古代のジャアナリストになった。同時に又古代のボヘミアンになった。彼の天才は飛躍をつづけ、彼の生活は一時代の社会的約束を踏みにじった。彼を理解しない弟子たちの中に時々ヒステリイを起しながら。——しかしそれは彼自身には大体歓喜に満ち渡っていた。キリストは彼の詩の中にどの位情熱を感じてゐたであらう。一山上の教へ」は二十何歳かの彼の感激に満ちた産物である。彼はどう云ふ前人も彼に若かないのを感じてゐた。この海のやうに高まつた彼の天才的ジャアナリズムは勿論敵を招いたであらう。が、彼等はキリストを恐れない訣には行かなかつた。それは実に彼等には——キリストよりも人生を知り、従つて又人生に対する恐怖を抱いてゐる彼等にはこの天才の量見の呑みこめない為(ほか)に外ならなかつた。

(注)

① 社会的約束 社会制度。風俗習慣。道德法律。など。パリサイ人の法に従わず、安息日に人をいやしたり、売笑婦と交わったりする

など。

②中に 中に於て、の意。

③時々ヒステリーを起し…… マタイ伝第十九章、十三に「爰に人  
ワイエスの手をおきて祈り給はんことを望みて、幼児らを連れ来り  
しに、弟子たち禁めたれば、イエス言ひたまふ『幼児らを許せ、我  
に来るを止むな、天国は斯のごとき者の国なり』」とある。弟子達  
は度々イエスに叱責を受けている。勿論、「ヒステリー」というの  
は芥川表現である。

④それ この指示代名詞は、社会的約束を踏みにじった事を指す。

⑤詩 詩的行為、言動。詩的いとなみ。

⑥どの位 どれ程、感じていた事か!!

⑦「山上の教へ」 マタイ伝・第五章・第六章・第七章。『幸福なる  
かな、心の貧しき者。天国はその人のものなり』から始まる。第七  
章、二十九には「それは学者らの如くならず、権威ある者のごとく  
教へ給へる故なり。」とある。山上の垂訓すいくんとも呼ばれ、キリスト教  
訓の要約で、最高の格調を持つことで有名である。

⑧海のやうに高まつた この海のやうにという比喩は海を持つ大な  
る力、をいうものと思われる。

⑨彼等 敵を指す。形式主義を奉じるパリサイ人たち。

⑩天才の量見 この「量見」とは、現実の身の破滅を、ものともし  
ない(で、突き進むことの出来る)ところの、土台にある考え方を  
いう。この天才とは、狂気的な天才であり、キリストを恐れる彼等と  
は、相対的現実主義者達である。

(解)

クリストは古代初のシアナリスト、古代初のボヘミアンとなった。  
愚昧な弟子達にかこまれてイライラしながら彼はむしろ大きな歓喜  
を感じつつこの社会の風習の一切を無視し踏みにじった。どんなに  
か彼は自身のこの詩的いとなみ(言動)に身一杯の情熱を感じた事  
であろう。まこと、彼の教えは詩的正義せぎの宗教であり「山上の垂訓  
」では、最早や権威ある者との自覚があった。彼にはむろん敵が出  
来た。敵というのはこの狂気的な天才の量見がのみ込めない、臆病な  
常識主義者達であった。

「聖霊の子供」と題したのは、聖霊(永遠に超えんとするもの)に  
憑かれたキリストの、成長を遂げた、その完成した姿や姿勢をとり  
あげ、俗世間や俗人達との差異を明確にしようというのではなから  
うか。

(吉田孝次郎 短大教授 国文学科)

(中野恵海 短大助教授 国文学科)